



主の 2014 年12月4日
第 87 号 クリスマス号

日本キリスト教団
泉ヶ丘教会
牧師 松永政和
〒590-0114
堺市南区槇塚台 1-1-5
TEL・FAX 072-291-9532
izumigaoka9532church
@ yahoo.co.jp (左記 QR コード)



■礼拝・集会■

- 主日礼拝(日)午前10時30分
- 教会学校(日)午前9時
- 聖書を学び祈る会(木)午前10時30分
- キリスト教入門講座・家庭集会
- マリヤ会・テモテ会、他

■教会標語■
『キリストを証する教会』
—手を携えて歩む—

「クリスマス物語」。純正のクリスマス物語は聖書の中にあります。全世界のキリスト教会が一つになって讃え、礼拝します神の御子イエスの誕生物語です。

物語に登場しますのは、イエスの父となるヨセフ、母となるマリヤ、そして神からの使い、天使ガブリエルです。ナザレという町に住んでいるマリヤそしてヨセフは、お互いに愛し合い、まもなく結婚の時を迎えようとする許嫁でした。そんな温かい日常の中に突然に降りかかってきた大事件。どのような姿なのか分かりませんが処女マリヤの前に天使が現れます。そして「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」と祝福の言葉をかけます。



若い女性が見知らぬ人から声を掛けられることなどない時代のことです。ただ驚くマリヤに天使はあろうことか、「あなたは身ごもって男の子を産む」と告げたのです。この後、マリヤが「どうして、そのようなことがありえましようか。わたしは男



の人を知りませんのに」と言ったように、天使の言葉が本当か嘘かに関わらず、このことが人の耳に入ったら、彼女の人生は閉ざされてしまいます。

しかし逃げようもありません、天使ガブリエルから、「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。」と聞かされてしまったのです。それでも受け入れることを拒むマリヤに天使は「神にできないことは何一つない」ことを、またそれはマリヤだけでなく、すべての人に大きな恵みとなることを語り聞かせます。

マリヤは主である神を信じる者でした。驚きとためらいの中にも、神が自分をを用いようとされておられることを悟った彼女は「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」と応えます。マリヤの心は穏やかになっていったことでしょう。「こんな女にも目を止めて、用いてくださる」ことを知ったからです。もっともとんでもない用いられたかたですが。

難問があります。このことをヨセフに伝えるべきか、どうか。神が為



フに伝えるべきか、どうか。神が為さることですから、神が最も良い答えを与えてくださるに違いない。そう確信してマリヤは婚約者のヨセフに天使ガブリエルの出会いからの一部始終を告げます。

ヨセフの驚きはどれほどであった

か。聖書はそのことについて「二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった」と記しています。明らかに知ったのはマリヤとヨセフです。家族にも他の誰にも明らかになっていません。しかし誰の目にも明らかになるのは時間の問題です。

「ヨセフは正しい人であったので、マリヤのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した」と、その時のヨセフの心境が綴られていきます。「正しい人」、神の掟を忠実に守り、正しいことを正しいとする人です。「この女は、姦淫を犯した」と訴えることは誤りではありません。しかし「正しい人」のもう一つの特徴は愛を大事にすることです。ヨセフはマリヤを愛していました。自分のひとことで、マリヤが人々の好奇の目にさらされ、悪くすると石打の刑という重い刑罰を受け、社会から抹殺されることになるかもしれない。「義と愛」の中でヨセフは悩みます。悩み疲れて寝入った眠りの中に主の天使が現れ、「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリヤを迎え入れ

なさい。マリヤの胎の子は聖霊によって宿ったのである」と告げます。それはマリヤがヨセフに告白したことで同じでした。

ところで、この「クリスマス物語」は二つの福音書に記されていますが、その一つ、「ルカ福音書」は天使とマリヤを中心に描かれています。そしてもう一つの「マタイ福音書」では天使とヨセフが中心です。マリヤは喋ります。分からないことがあれば訊ねます。そして納得して最後には神の御心に従います。ヨセフは喋りません。驚くほどひと言も語っていません。そして最初から神の御心に従っています。

このように、一つの「イエス誕生」の出来事も二つの福音書によって随分と描き方は違います。しかし物語の中心部は同じです。男の子は聖霊によって身ごもることに始まります。ヨセフには「マリヤは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい」と告げ、マリヤには「あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい」と言われ、人が決めるのではない、神の御子の名が先んじて示されます。誕生の意味を、

「その子は偉大な人になり、いと高き神の子と言われ、自分の民を罪から救うためにである。」

そして、「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる」と、遠い昔に預言されていたことの成就だと告げるのです。「インマヌエル」とは、「神は我々と共におられる」という意味です。「イエス」という名の意味である「主は救い」と重ね合せますなら、「クリスマス」は「神が人となってこの地に来てくださり、私たちの救いとなってくださり、永遠に私たちと共にいてくださる」。そのことを喜び感謝する時と言えます。

マリヤ、ヨセフ、夜の馬小屋の光景、羊飼いたち、東の国の博士たち、ロウソクが灯され、お祝いのケーキ、プレゼント、空に輝く星々、そのようなもの何一つなくても、真に神であるお方が、真に人となられた。これが真のクリスマス物語です。 Ω



クリスマスの喜び

本田 昌子

クリスマスは、主イエスが私達人類の罪を贖う為に（端的に言えば十字架に架かる為に）人としてこの世に来て下さった事を信じる全てのクリスチャンにとって、感謝と喜びの時であります。

私にとって、その喜びが実感となつたのは、44年前、せっかく与えられた初めての子どもが召された時でした。壮絶な4ヶ月の闘病生活の末、必死の祈りは聞き入れられず、10ヶ月足らずの短い生涯を閉じたのです。大きな悲しみ、何とも形容し難い空虚感、絶望感に打ちのめされ、私自身の死さえも願う日々となりました。どんな慰めの言葉も空しく響くのみでした。

客観的に考えれば、もっと成長した後に我が子を亡くされた方は思い出がただけに、私よりももっと辛い思いをされたと思うのですが、当時の私は自分が世界一可哀想な悲劇のヒロインになっていました。

そんな中で、誰にも分かってもらえないこの気持ちを主イエスだけは分かって下さり、今、傍らで共に悲しんで、共に涙を流して下さっているのを実感したのでした。

神は全知全能の神だから、今この私の悲しみを全部分かって下さっているというのは、頭では理解していても、神に対しては「傍らにいて、共に」という感覚は持てませんでした。

神でありながら、人としてこの世に生まれて下さり、あらゆる試練にも遭われ、そして想像を絶する過酷な十字架への道を歩まれた主イエスだから、真の神であり、真の人間であられた主イエスだからこそ、この私の気持ちを理解し、共に担って下さっている、と思えたのでした。

その実感を持てた時、私は本当に慰められました。そして「もう泣かなくて良い。立ち上がって歩きな

い」との励ましを受けて、少しずつではありましたが、だんだん元気を取り戻すことが出来ました。そして6年もの間、離れていた教会にも戻ることが出来ました。

あんなにも主イエスを身近に感じたことはありませんでした。聖霊の導きによる大きな恵みだったと思います。

「主が与え、主が取り給う。主の御名はほむべきかな」ヨブ記

娘が召された事も人間の知恵では計り知れない神のご計画の中にあっただのと受け入れられるようになりました。

主イエスが私達の為に、人としてお生まれになられたクリスマスを中心からの感謝を以てお迎えしたいと思います。



教会の三階は

ケーキ作業場

齊藤 百合子



日曜ごとに神様の御言葉を聞くなる公同の教会堂だけ見ていると想像もできない。ここは、くだけた雰囲気の中になに不思議な暖かさのある一集団の作業現場3階集會室。時間を作って毎年秋頃からクリスマスが終わるまで4回ほどケーキ作りの作業場になる。

わたしがまだ受洗したばかりの頃のことだ。教会でケーキを作ったとうするのかしら、どのようにして作るのかしら。それをどうするの、売るのがかしら、みんなで食べるのかしら?どこかへ持っていくのか、ひとつくらい食べてみたいなど、勝手に考えたものだった。

ある時ちよつと覗いてみることにした。エレベーターを降りると、集会所の中から何か金属製のものをポード板に叩きつけているような、ペタアーン、ペタアーンという音だ。これがケーキを作る作業の一部にしては荒らっぽすぎるじゃないか、と思いつつ、ちよつと隙間から覗いてみると、居るわ居るわ、1, 2, 3, 4, 5, 10人程の女性たちのエプロン姿、ビニール手袋、白い帽子。奥の方でクルクル回るハンドミキサーは、ケーキの生地作り、みんな天使のように頬笑みをうかべ、何やら小声で耳打したり、またくるくるくるくと回す、鍋つかみの大きな手袋の天使は立派に焼き上がった大きなケーキを愛しそうにテーブルにならべている。

そこまで出来上がるまでに材料を整えるたりするのに時間もかかるでしょう。専門店に行けば、このころは一切を揃えることもできる便利さはあるが、ここにはもうバター、砂糖、卵、パウダー、レモン、干しブドウ。テーブルの上はそうゆうものが、使う順序に置かれていて、過去の何回も作った経験の積み重ねな

のか。誰がリーダーかはわからない。一人ひとりがみんな主人公のように動き回る。わたしは、先にここで天使と表現したが、その真剣な作業姿を見ていると、礼拝室で祈りをささげている皆さんの美しい姿と重なるのだ。この時代、多くの災難苦難と向いあわなければ、生きられない世の中だけど、その機会を与えてくださることのありがたさを考える時でもあった。



パウンドケーキは、薄力粉、バター、砂糖、卵、4種類をそれぞれ1ポンドづつ使って作るからその名を「パウンド」ケーキといい、材料を同量使うことに由来する名前だとか。生地作りは、適当な艶と色、粘りが出るまで混ぜるのではなく、含ませることだとか、何やら難しい説明。だが天使たちは心得たもの、オレンジ、レモン、ラム酒につけておいたレーズンの他に、クルミなど適量をきちんと量り丁寧に混ぜ合わせて、最高に見栄えよく仕上げるのも慣れたもの。180度で40分〜50分焼くと説明もあった。熱いうちにシロップをたっぷりぬった美しい焼き加減、甘くてその上にレモンの味がほんのりと、何か訴えるようなケーキの色と姿、一面に漂う独特な匂い。凛とした立派なケーキの出来上がりです。

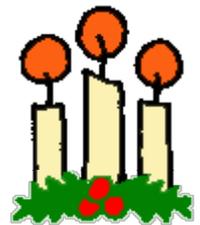
贈り物は手際よくさっさと、きれいにラッピングされて箱に入れていれるのは交流のある教会への贈り物だという。バザーには外部からのお客さまにもこの味を堪能してもらう、とのこと。

を終えたパックがもう休んでいる。いつも顔見知りのメンバーが今日はここで無心に作業している姿をみて、何だか今日は涙がそう。作業が終われば一杯の紅茶に添えてくれた手づくりパウンドケーキの試食「おいしいネ」と全員の顔がほころびる。クリスマスには誰に贈っても、心のこもった最高のプレゼントだといって喜んでいただけると思う。「願わくは、この世に一日も早く、御国をきたらせたまへ」と祈るものである。 Ω



言葉

長澤 真理



「初めに言葉があった。言葉は神と共にあった。言葉は神であった。」
(ヨハネによる福音書一章一節)

昔私がまだ学生の頃、祖母に「真理ちゃんは何の慰めになる人になつてね」と言われました。時々この言葉を思い出します。おしゃべりな私は慰めどころか傷つける事の方が多いのではないだろうか。

今年には本当に悲しい年でした。

一月に若く美しかった同僚が乳癌で、亡くなり、その後生徒のお母さん(肝っ玉母さんみたいなひとで大好きでした。)そして一番親しい同僚の夫さん。彼は私の声楽の師匠でもありました。ウオーキング仲間の

お姉さんも。どの方も本人は勿論周りの人たち誰も予期しない死でした。こんな時どんな言葉が慰めになるでしょうか。いつもはお喋りなのに無口になります。不用意な言葉で悲しみを増させることを恐れます。そんなとき私は祈ります。
「言葉を与えてください。今日も私の言葉と行いを守ってください」 Ω



〈遺 詠〉

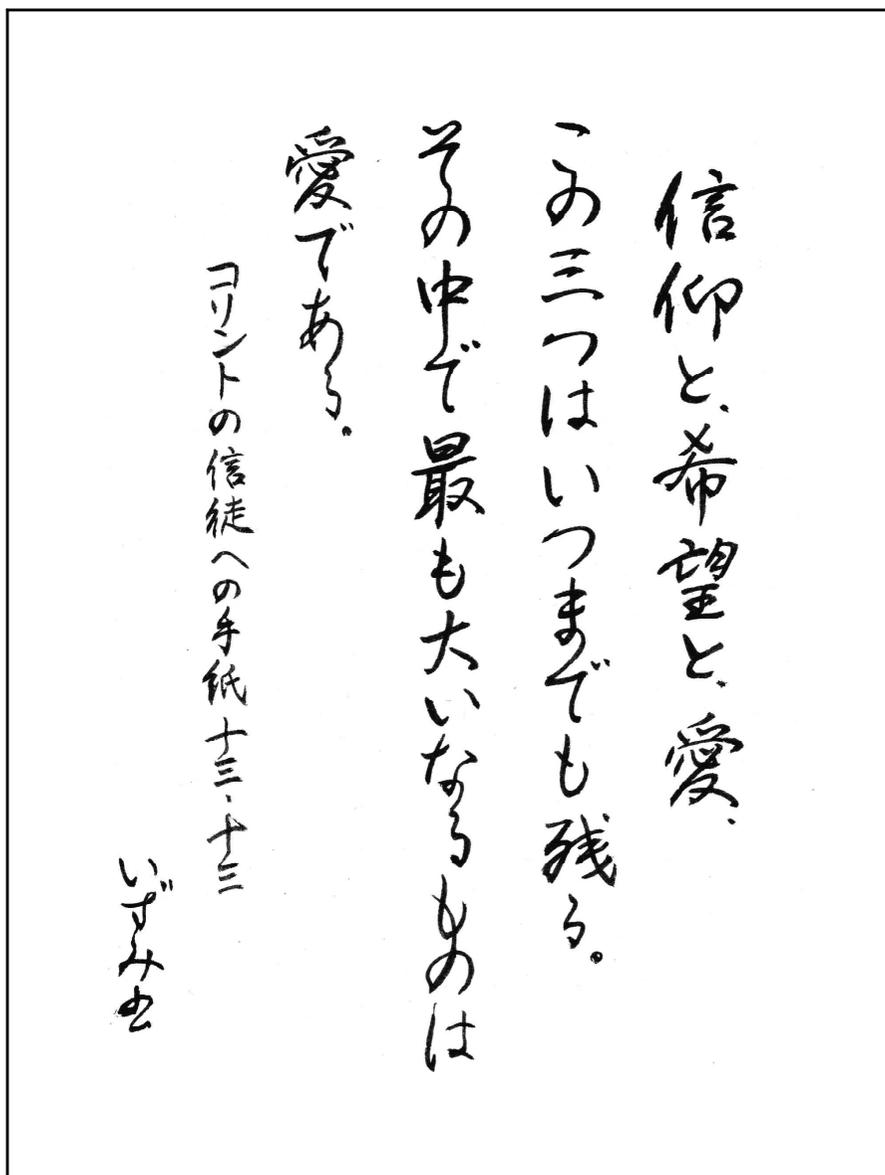
木漏れ陽

夷 瑞穂



ひたすらにただひたすらに生きており 愛あればこそいのちいとおし
罪多きすぎし方をふり返り 眠れぬ夜半を孫と語りぬ
逝きし娘に伝えるすべのありやなしや わが残る日を神に仕えたしと
願わくは神に仕える身とならむ 心安らぐ老いしこのごろ

今春、天に召されました愛する夷瑞穂姉が生前に残されていた歌集『木漏れ陽』を、泉ヶ丘教会求道者であるお孫さんの光君が、クリスマス教会報マナに使用して欲しいと持ってきてくれました。今は主の御手の中に憩われている在りし日の夷姉の確かな信仰と優しかった笑顔を思い起こしつつ、謹んでご紹介させていただきます。



コリントの信徒への手紙十三・十三

いずみ

先月の3、4日と槇塚台の『作品展』がありました。住民の絵画をはじめ書道、華道、写真、手紙、絵手紙等を出展するのです。私も去年に引き続き出展しました。

書道で色紙に漢字一文字を書こうと考え、松永先生に「キリスト教で一番大切な言葉は何ですか」と尋ねると、「愛、信、三文字だと望」と教えていただきました。

色紙一枚に一文字、三文字だから3枚。よし信、望、愛の三文字を書こうと思いました。信、望、愛を書ききつかけになった聖句です。

辺見 いずみ